

韓国と私——加害者意識の欠落——

森 宏

30年振りの帰韓

終戦の翌年に「引き揚げ」て以来最初にソウル（旧京城）に戻ったのは、1975年春であった。マレーシアのクアラルンプールで開かれたFAO（国連食糧農業機構）主催の「大都市における食料品流通」に関するワークショップに出席したついでに、東マレーシア・サバ地方の

目 次

韓国と私——加害者意識の欠落——	1
30年振りの帰韓	1
70年代後半からの韓国経済の急成長	5
経済成長に追いつかない意識	8
韓国人は日本人そっくり	10
韓国人と日本人の違い——呉『チマパラム』	13
加害者意識の無さ	14
海外トイレ事情	17
はじめに	17
「コーヒーを飲みたい」	17
アメリカのトイレ事情	18
(1) 男・女便所の隔離	18
(2) トイレの呼び方：Bathroom, Restroom など	18
(3) トイレのボーイさん	20
(4) 公衆トイレと安全性	21
外国に公衆トイレが少ないいま1つの理由	23
<編集後記>	24

対日本材積み出しの実態を案内してもらい、真直ぐ帰るのも少々迂廻するのも料金は同じということなので、台北とソウルに寄ることにした。

台北ではアメリカ留学時代の親友テリー・ユ－⁽¹⁾のところに泊めてもらい、旧交を温めた。

蒋介石総統が前日の夜かその日の朝に亡くなられたとかで、台北の空港は異常な雰囲気になっており、がらんとしたラウンジで長い時間待たされた。その内私と同じくらいの年恰好の韓国人とおぼしき一人の紳士と、初めは英語で、すぐに日本語で会話を交すようになった。商用で台湾の南の地方を廻り、ソウルに戻るところであった。話をしていると、終戦の少し前に韓国人の秀才達の集る京幾中学を卒業して旧京城帝大に進み、現在は原料食料品中心の商社を経営しておられるとのこと。日本語が達者なはずである。私がソウルに行くを知って「折り入って頼みがあるのだが、“ナポレオン”(コニャック)を3本買って、ソウルで通関がすんでから自分に渡してくれないだろうか。お金はウォン(円)に換算して明日1番にホテルに届けさせるから」「ドルの持ち出しはわれわれ商用で出掛ける人間にも厳しく制限されており、酒類は栓を開けていないものは私達韓国人は持ち込めないの」と言う。コニャック3本といえば当時の私にはかなりの金額だったし、明日ホテルに届けさせると言われても一抹の不安は残る。しかし私の母校京城中学の良きライバル校であった京幾中学の卒業生と聞いて、一種の敬意を含む懐かしさを感じていたし、「世話になっている先輩には何よりの贈物なので」というのも、自らの経験に照してわかるような気がした。

出発が大幅に遅れたので、ソウル近郊の金浦空港に着いたのは深夜に近かった。「これでは“カーフェュー”⁽²⁾(夜間禁止令)にひっかかり、タクシーも都心に入れられないかもしれないから、今晚は私のうちに泊りなさい」と言って下さる。この真夜中に見ず知らずのお宅に突然お邪魔するのは気がひけたし、正直言って若干の不安がないではなかった。しかし町中へ入れないのでは仕方がない。

出迎えの氏の会社の車で、非常時にはいつでも飛行機の発着ができるように作られているという広い高速道路を走ってお宅に着いた。昔は原っぱだった漢江の川岸に建つ十数階建の立派なマンションの上層階で、広さも当時私の住んでいたアパートの軽く1.5倍はありそうであった。松の実か何かで軽くビールを御馳走になった後で、オンドルの部屋に泊めてもらった。近代的なマンションにオンドル⁽³⁾は何か不釣り合いな感じだが、これが韓国なのだろう。

2人のお嬢さんは遅いお父さんの帰りを待ち詫びて休んだ後だったが、氏の奥さんとの会話は、「留守中ちゃんと勉強をみてやったか、ピアノの練習はきちんとやらせたか、明日の朝は私が学校に送っていくから云々」ということらしかった。「受験戦争」があまりにひどいので、当時は家庭教師は法的に禁止されており、家庭での勉強は親がみざるをえなかったのだ

そうである。片やソウル大、片や梨花女子大出身の「教育パパ」、「教育ママ」の家庭らしく、その点では日本と全く変らないと感じ入ったことである。

長い一日の後、固くてつるつるすべる温められた床の上で、上・下とも薄いフトンにくるまっの睡眠からさめると、氏はすでに日課のジョギングから戻ってこられたところであった。「シャワーをどうぞ」といわれるので、「汗になっておられるでしょうからお先にどうぞ」と譲ると、「自分は寝室のを使うから御遠慮なく」といわれる。

台所や洗面所で同時にお湯を出すと、「ヒュー」と悲鳴を招くことの多い我が家とは大した違いであった。最近でこそ多少良くなったが、日本の住宅事情はまことに寒いものである。

日本や台湾とも違う食卓一ぱいの朝食を御馳走になった後、氏の車で送っていただいて、早めにホテルにチェック・インした。小学生の頃行き帰り毎日その横を通った朝鮮ホテル（現在も昔と応じ名前 Chosun）に泊りたかったが、相変わらず別格なのか、個人の“センチメンタル・ジャーニー”の予算をこえていた。止むなく K ホテルに予約を入れてあったが、旧総督府から南大門にかけての大通りに面し、子供の頃毎日のようにせみ取りやおたまじゃくし掬いに通って、守衛さんに、「君達が来るとセミがみんないなくなるから明日からきたらダメ」などとからかわれたりした徳寿宮のすぐ横であった。

ボーイさんに部屋に案内されるや、私は懐しきの余り通りに面したカーテンを一ぱい開けひろげた。すると「アニョ（ダメ）」と悲鳴に似た声と共に、荷物を片して部屋から出ようとしていたボーイさんが飛んできて、大急ぎでカーテンをしめ直したのである。私は何の事だかわからないが、ともかくこのカーテンを開けてはいけないと言う。後でフロントの説明を求めると、今日の午後、時刻はわからないが朴大統領がこの前の道路を通ることになっているので、それに面している建物のすべての部屋は事前にチェックされているとのこと。テキサス州グラスでの J.F.ケネディー大統領の二の舞をおそれることなのだろう。懐しい昔の「シマ」の出来事だけに、ショックであった。「そうなんだ。ここは日本とは違うんだ。」

気を取り直し、南山の北の麓にある昔の小学校への道を辿った。朝鮮戦争の2回の「ローラー」で殆どあとかたなくなると聞いていたが、あの辺りの町並は殆ど昔の俣であった。小学校からの帰り途、冬など寒くて凍えた手足を温めると、かくれんぼするため(?)、しばしば立寄った旧「三越」は名前こそ「新世界」に変わっていたが、もとの姿を残していた。その建物の電気工事は、昭和の初め電力会社の京城電気を辞めて独立した父が、森電気商会の社運を斗して取り組んだ大きな仕事であった。

黒大理石の建物の要所要所に張り出した青銅の外灯は重々しく豪華で、子供心にも誇らしく思ったものである。その工事の際は、配線パイプにコンクリートを流し込むなど、ヤクザの

いやがらせがひどく、たまりかねて母が父の右腕だった職工長の李さんと2人だけで親分のところに向け合いに出掛け、それ以降一目置かれるようになったなどという話も聞かされていた。

父の店がやったと言っても信用してくれそうもないので、友人の誰にも言ったことのなかったあの壮大だった建物が、いまや何と小さいことだろう。三越の右横の建物は貯蓄銀行で、花崗岩の白壁の柱は下から見上げるとどこ迄も高く、天に届くばかりであった。子供心に、ここにはどれだけ沢山のお金が入っているのだろうかとかと空想をふくらませたものであった。しかしいま見るその建物は決して変哲もない5～6階建のビルにすぎず、私とその少し前迄住んでいたエレベーターもない5階建の公団住宅とそう変わらないのである。

その先小学校迄足を伸していった。学校の正面はすごい急な坂で、自転車を習い覚えただけの頃兄の友人達にはやしたてられて、ブレーキをかけることも出来ないまま坂の下の曲り角の石塀におでこをぶつけ、それ以降、だから少々「おかしくなった」といわれている、曰く付きの場所であった。ところがどうだろう。「これ坂?」という感じなのである。後で関係者にあの辺りは地上げでもしたのかと尋ねたが、昔のままということであった。

後でもふれることになるが、1992年の初秋、ニュー・ジランドからの帰途、初めて家内を伴ってソウルに行った時、前出朝鮮ホテルの辺りから母校南山小学校のすぐ下の明洞の付近を案内した。「越境入学で遠くまで通っていたと聞いていたけど、これだけのところをよくも30分もかかっていたものね。余程あちこちフラフラしていたのでしょね。寄り途のくせはその頃からのものなんだ」と家内にあきれられたものである。「子どもにとっては、自分の世界はとても小さい。体が小さいふんだけ、自分の故郷はすごく大きいと思って育つ。何年も前に、ある雑誌の取材で久しぶりに故郷を訪ねたとき、その小さいのに驚いたのを覚えている。故郷にはあまり帰らないほうがいいのかもかもしれない。自分の心のなかの大きい存在……それが私のルーツなのだ。」森英恵『ファッション——蝶は国境をこえる——』岩波新書、1993年10月20日、第1刷、10頁)。

注

- (1) Terry Yu, 余玉賢の英語式の呼び名。当時は台北市の通称 RRC, Rural Reconstruction Commission (農復会) の senior economist (技正)。後、台湾省農林庁庁長(後出)を経て、行政院農業委员会主任委員。1993年肺癌で没、合掌。
- (2) curfew。その少し前、日本の文学者の一行が韓国を訪れた。機中で「カーフェュー」の説明を受けた後、語源を知っているかをたずねられたグループの一人、したり顔に「car (車) が few (少) だから、外には出られないのよ」とこたえたとか。無論その人は T 大の英文科卒。ある週刊誌記事の記憶から。

(3) 温窓と書く。石の床下に仕切りを設けて火坑とし、これに温かい煙を通して部屋全体を温める。古くから朝鮮にあるいわば床下暖房。当時は朝鮮風の建物の1階部分にのみあるものと思っていた。

70年代後半からの経済の急成長

二度目に韓国に戻ったのは、それから2年半経った1977年秋であった。ソウルから南へ数十キロ下った^{イリ}裡里市の圓光大学 (Won Kwang University) で、アジア財団後援の農産物流通に関する国際シンポジウムが開かれ、わが国の事例を報告するために招かれた。金浦空港には、海外からの招聘の世話をされたソウルのある大学の某教授の教え子の大学院生らしい人が迎えてくれた。ところが彼は日本語は無論のこと英語も一言もしゃべれない。あがっているのか読み書きも出来ない。ハングル以外なら通ずると思ってか、ドイツ語でペラペラ話しかけてくる。近くドイツに留学することになっているらしかった。私は30年前に旧制高校の理科3組 (医学部進学コース) でドイツ語は結構やったつもりだが、とっきの事で全く出てこない。

教授が予約してくれたところは町中の純韓国風の宿屋で、その女将さんが私より多少年嵩か、久し振りとは言え流暢な日本語で2人の仲立ちをしてくれた。「今晚は安心してここに泊りなさい。明日は韓国風のおいしい朝御飯をどっさり用意するからそれを食べて、何時にこの学生さんが迎えにくるからタクシーでソウル駅に行き、そこから特急で裡里に行きます。お金は〇〇先生からこの学生さんがあずかっているから、何も心配することはありません云々」と。

韓国で生まれ育ち、こちらからはきちんとしゃべれなくとも、簡単なことなら相手の言うことは大体カンでわかると高をくくっていたが、日本語も英語も全く駄目という人相手では私の韓国語は、私のドイツ語同様、完全に無力であった。そして共通の言葉がなければ、本当に全く通じ合わない。初めての、不思議な経験であった。

それはそれとして、多くの日本人の英語は、みんな中学から大学受験迄あれだけエネルギーを使いながら殆ど役に立たず、情けなく歯痒いと思っていたが、韓国の事情はどれも日本と寸分違わないらしい。そういう意味では、わが国の英語教育だけが特殊な訳ではない。変な事に感心したり、安心したりした。

ところで私がこの学生さんのことを引き合いに出したのは、かれの英語力ないし私のドイツ語力の低さを嘆くためではない。実は空港に出迎えてくれたこの学生さんは、同じように

近くドイツに留学することになっているらしい一人の女子学生と一緒にであった。

彼女を伴っていたのは、ステディーのガール・フレンドで何時も一緒にいたいとか、彼女が日本語ないし英語がわかるからというのでもないらしい。後から考えると、どうもタクシーをつかまえるための要員であるらしかった（説明は後）。

2年半前に韓国に来た時は、ホテルの前にはいつもタクシーが長い時間待っていて、帰国する朝もあらかじめ車の手配など心配する必要はなかった。しかし今回は違っていた。うまい具合に独りでタクシーを拾って目的地へ走っていると、若い学生風の人を含め、何人もの人が歩道から車道へ飛び出してきて手を上げる。その度に運ちゃんはスピードをゆるめ、「どこどこ」ときくと、こちらに断りもなく私の横に乗せて走り出す。又誰かが飛び出して来て手を上げる。同方向の乗り合いタクシーである。

日本は78年の第1次オイル・ショック以降深刻な景気後退に見舞われたが、その間韓国経済は目覚ましい発展をとげた。国民1人当りのGNPは、1974年には480(米)ドルに過ぎなかったが、その後年率20～30%の高率で伸び続け、1978年には1,200ドルになっていた(世界銀行調べ)。75年春韓国を訪れた時は、かつて中学生の頃登・下校時にその前を通った西大門郵便局の前に、若い学生風の青年が多数列を作っていた。案内してくれた農業団体の人の話では、臨時の仕分けか何かの仕事に応募しているらしかった。(昭和初めの小津の)「大学は出たけれど」(1929)ではないが、名門のソウル大学を出ても、まともな職はなかなか見付からないのだそうであった。

経済が浮揚して、若い人達を含め人々の懐が豊かになった。物価抑制のためもあってタクシーの料金は据え置かれたので、当然需要は拡大する。しかし一方でタクシーの台数増加は厳しく制限された。大幅な需要超過に対処する現実的な妥協策として、政府は相乗りを大目に見るといふより、積極的に認めることにしたという経緯があったらしい。言葉のやりとりが聞きとれないし、確かな距離感もないのでよくわからないが、先に降りる乗客は各自メーター相当分くらいを置いて降りていくようであった。1992年夏ニュー・ジランドの帰途ソウルに立ち寄った時、88年のソウル・オリンピックの後だったから道路も整備され、車の数も格段に多くなっていたが、タクシーの相乗り制度は残っていた。

日本のタクシー料金は、多くの先進諸国と比べても著しく高い。空港などでは客待ちのタクシーの長い列ができる。恐らく1時間も2時間も待っていたのであろうから近い距離だと気がひけるし、また実際乗車拒否に会うことも少くない。他方深夜など郊外電車の駅前では乗客が長い列を作り、雨の日など1時間以上待たされることもある。料金をもっと下げ、他方時間帯や場所によって相乗りを認めるということも考えられてよいのではなからうか。

韓国の古くからの民芸品に、貝をちらばめた黒檀や紫檀の漆器がある。小は宝石箱や硯入れから、机やタンスまで大層美しく、しかも堅固なものである。戦後私の家族が各人リュックサック1つずつで引き揚げて来た時も、家族の誰かが、小部屋にわかれたオードブル・セットの貝細工を、大事にかかえてきたのを覚えている。

75年春初めてソウルに戻った時、ホテルの土産物売場にその種の民芸品がいろいろ並べられており、品物の割には値段が随分安いので思わず飛びつきそうになったものである。それでも、「いやいやここは我が町、ホテルの売店で買うのは沽券にかかわる」と町中へ繰り出していった。30年振りでも私の土地感はなかなか冴えており、目指すところにその種の店が幾軒もあり、観光客用ではない本物の品物が並べられていた。そういう店では英語は余り通じない。そこで「イゴ・オルマニカ（これいくらですか）」と、昔取った杵柄がよみがえってくる。ところがである。かえてくる数字は何万何千何百円（ウォン）、物によっては10万円台のものもある。昔駄菓子屋や往来の立売りで買い食いをした時は、せいぜい何十銭、高くて1円50銭というオーダーであった。しかし今やハナ（1）、ツー（2）、セー（3）では間に合わない。そこで「ウリ イルボンサラミ。ハングルマリ モウラヨ（私は日本人。韓国語は分かりません）」と（筆談用に）紙を差し出すと、「何、あんたが日本人の筈はない。からかいは許さない」とすごい見暮でまくしたてる。

そう言えばそういう事は昔よくあったことである。電車の乗り換えの場所などでお年寄りに道をきかれる。麻浦（マッポ）とか京城駅とかの簡単なことなら何とかなるが、少しこみ入った地理になるとお手上げで、「ウリ チョソンマリ モウラヨ」となる。しかしこの言葉は、英語のように学校で字を通して習ったものでなく、小さい時から自然にいわば「ネイティブ」に囲まれて覚えたものだから、完全な朝鮮語だったのであろう。「何を言っている。朝鮮語はこんなに上手なのに。年寄りには親切にしなければいけない」と、腕をかかえて離してもらえないことがよくあった。

2年半前に初めて行った時は、旅の終わりでお金も残っていなかったもので、いいなと思って貝細工の漆器は小物を1つ2つしか買い求めることが出来なかった。ところがそれらが家内と彼女の友人達に大変評判が良く、「どうしてもっと買ってきてくれなかった」と残念がられた。そこで2度目の渡韓に当っては、一緒に書をやっている仲間のために小さな硯箱幾つと、うち用に文箱と……と注文をつけられた。裡りのシンポヂュームの後2～3日ソウルに滞在したので、また同じところへ行ってみた。ところがである。昔の小学校の下の通りで地理に間違いのない筈なのに、あの種の店は全くと言って良い程姿を消しており、その代り多くはカセット・デッキやTVなどの電気器具店に衣替えしているのではないか。1～2家具・調

度品の店として残っていても、貝細工の民芸品は安物のお飾りか、目の玉が飛びでる程高価なものだけで、家具なども大部分洋風なものになっている。その辺りの町並みは変わっていないのだが、中身の変容はまさにショッキングであった。

期待している家内の仲間に、「見付からなかった」では済みそうにもないので、中学時代の数少ない韓国人の友人で、心臓病の専門医をしているS君に相談した。「ああ、あの手のものは最近作る人が少なくなったからね。あることはあるけど結構高いよ」と、鐘路の奥の方でヤンバン・サラミの行きそうな骨董屋などの多い地区に案内された。2年半前の価格がまだ頭にあったので決断に時間がかかったが、いまだに我が家の宝物の一つになっている。S君には、「みんなキーセン・ハウスに連れていけというけど君は珍しいね」などとからかわれたりした。人並みに“H”のつもりだが、子供の頃の純真な思い出のあるところでは、余りそういう気にはなれないものである。

経済成長に追いつかない意識

その後韓国経済はすさまじい高成長を遂げた。1人当りGNPは1978年の1,200(米)ドル(上述)から1987年に2,960ドル、1991年には6,330ドル(世界銀行調べ)になっている。ところで1992年の冬北海道の小樽商科大学で、GATTのウルグアイ・ラウンドをめぐる国際シンポジウムが開かれ、世界各国から研究者達が集った。コメを含め市場開放賛成の全体的雰囲気の中で、韓国からの参会者の一人が最後のセッションで、「韓国の農民の現状を考える時、自由化に安易に賛成する訳にはいかない」と、私など大いに同感する胸をうつコメントをした。ところが発言のある箇所皆がくすくす笑い出した。彼は自分の英語が妙だからか、それとも皆が不真面目だからかとかぬ顔であったが、われわれ、特に欧米からの参会者が同時に笑い出したのは、「韓国のような後進国ないし低所得国では云々」のくだりだったのである。

日本人の多くは、まだ「小国」意識から抜けきれないでいる(「大国に抗するナショナリズムを持って 現状の国際関係では、どうしても大国と小国は、従属・被従属の関係におかれる。日本も経済大国アメリカや軍事大国ロシアの風下に立たされて、無理難題を吹かけられますね。」吉本隆明『わが「転向」』文芸春秋、1995年2月20日、56頁)。韓国人の多くも、その点われわれに良く似ている。急速な成長に意識がついていけないのか、それともそもそも自分の事は控え目に見る習性なのであろうか。

1991年から92年にかけてニュー・ジランドのマッシー大学にいていた折、奥さんお手製の

キムチなどを持ってよくうちに訪ねてくれた大学院生 S 君はソウル大学出身で、ある銀行のエリート職員だが、彼の英語は、少くとも会話に関しては、お世辞にもうまいとは言えない。飲みながら雑談する時は、つつい漢字を並べての筆談になることがしばしばであった。私の知る限り、韓国人の（経済関係の）学者で英語のうまい人は少ない。国際会議などで結構クセのある英語をしゃべるヨーロッパ、ラテン・アメリカや東南アジアからの参会者がどっと笑う時でも、韓国と日本の代表の席はまことに静かなものである。その点両国民は極めて良く似ている。経済は中進国を越え先進国になっても、国際的なアリーナでは言われればなしになって口悔しい思いをすることが多い。だから意識ではいつも後れをとるのかもしれない。しかしそれも考え次第ではかえって良い事なのかも知れない。（金銭的な）1人当たり GNP では香港に追い抜かれながら、国民の大多数はなお先進国意識から抜け切れないでいるニュー・ジランドで、秀才の S 君に私のあやふやな漢字を直してもらいながらの筆談を通して、その感を強くしたものである。

韓国人が、話す英語に関しては日本人同様、なかなか「テーク・オフ」できないのは事実だが、かれらはすべての外国語に弱い訳では決してない。私の大学に來ている韓国の留学生達をみると、韓国で若干基礎を学び、日本に來て1年もすれば講義は勿論、テレビなども難なくわかるようになる。日本の学生が韓国に留学した場合も大体そのようであると聞いている。日本語とハングルは語順も全くと言って良い程同じで、漢字を多用すれば大抵のことは余り不自由なく通じ合える。基本的に思考方法が同じなのであろう。

日本人にはハングルの発音はそう簡単ではないが、欧米人が聞くとハングルなのか日本語なのか区別がつかないという（本学経済学部加藤浩平氏）。言ってみれば、我々にスペイン語とポルトガル語、あるいはドイツ語とオランダ語の区別がつかないのと一緒なのかも知れない。

3度目に韓国を訪れたのは1980年の5月で、韓国農業技術者協会が付設の流通研究所の開所を祝して開いた、「農産物マーケティング・システムと政策」の国際シンポジウムに招かれた時である。その折は2～3日の短い滞在期間に、私より日本語の上手な年配の事務局長が付きっきりで、それこそ至れり尽くせりの歓待だったので、独りで出歩くことが出来ず、殆ど記憶に残っていない。

それでも韓国の経済が急激に豊かになり、人々の表情もずっと明るくなったように感じられた。日本と違い学生運動は盛んなようであったが、それに参加するとまともな職に就けず一生を棒に振るといった深刻さはなくなっていたようである。事務局長氏等の話しでも、「中央官庁は無理かもしれないが、産業界はかえってそういう学生の方が元気がいいと言って歓迎

する位です」との事であった。そう言えば、若干時間的ずれがあるかも知れないが、バンコクのFAOのワークショップに参加しての帰り、空港の待合室で私が何かの事で当時の全斗煥大統領の事を誉めると、韓国から来ていたH氏は英語で、はき捨てるように「軍人でいい奴はいない」と言う。私は思わず「こんなこと言って大丈夫かしら」と辺りを見廻したくらいである。聞くとここによると氏はその後着々と昇進を続け、現在では大臣の位にしているとのことである。

韓国人は日本人そっくり

4度目に訪れたのは1992年の夏の終り、1年間のニュー・ジランド留学の帰途であった。家内に私の生れ故郷を見てもらうのが主な目的で、全く私的な旅行であった。ニュー・ジランドの後、割とのんびり米国や欧州を廻ってきたので、お金は余り残っていなかった。都心の一流ホテルは高いので、漢江の南岸の新開地に建つ、恐らく中の上クラスのホテルに泊ることになった。それでもホテルのレストランのメニューを見ると、とても食欲のわく値段ではない。夕食は外に出て安いメシ屋を探すことにした。

最初の晩は、外から見ると新宿や渋谷辺りにある炉端焼きそっくりの店に入ってみた。ゆったりした小奇麗なつくりで、7～8組の客が談笑しながら食欲を満していた。家内と私は「矢張りホテルで食べると高いからこういう所へ来ているのだね」と言ったりした。彼等の服製や何となく聞えてくる会話の調子や仕種から、彼らの多くは日本から商用で短期間こちらへ来ているビジネスマンに違いないと思いついていたのである。ところが後でトイレにたつて彼等の側を通過して耳をすますと、みんな私には全く聞き取れない言葉、ハングルをしゃべっているのである。席に戻って家内に言うと「まさか、そんな筈があるかである。しかし私はそれがハングルかハングルでないか位はわかるのである。家内がしみじみと言く「似ているわね」と。だから韓国の人々が日本に来ると、別に語学の才がなくともすぐ日本語が上手くなるし、また全く同じ程度ではないにせよ、日本の人が韓国に来るとハングルが出来るようになるのであろう。

次の晩町中の明洞に近い小さな食堂に入り、^{ジンロ}真路を飲みながらゆっくり落ち着く。そこいらは昔小学校の飛び切り優等生のKの家と、ガキ大将のMの店(下駄屋さん)があったところである。小学生の頃に思いを馳せながら往来を眺めていると、ビルの地階から3～4人の若いサラリーマンが出てくる。一番年上の係長らしい男に他の3人はペコペコ頭を下げている。「今日はどうも御馳走様でした」と。それに対し件の係長氏はややそり返って、「いやいや大

した事ないよ。それより明日からまた頑張ってくれよ」とでも言っているらしい。ガラス越しだから言葉は聞こえないのだが、パントマイムでも雰囲気でちゃんとわかる（ような気がする）のである。

小さな頃韓国に住んで居た時は、韓国人と日本人は言葉は勿論、食物も全く違う人種だと思っていた。公の場では日本語を強制されていたが、大抵の韓国人のしゃべる日本語は濁音が欠けていて、すぐわかったものである。また当時の日本人の多くはニンニクは口にしようとしなかったから、口臭、体臭でも区別がついた。それにとどまらず少なからぬ日本人は、顔や体付きまで日本人と韓国人は違うと信じていた。私もその一人であった。

しかし戦後アメリカ人を始め多くの西欧人に接し、また彼らの言語にふれるようになると、私のなかで日本人と韓国人の差は限りなく小さくなる。ハングルの発音には日本語にない母音があってとても無理だと思っていたが、英語やドイツ語のそれと比べる至って簡単なものであることがわかる。食物も戦後、恐らく昭和20年代後半、中国（風）のぎょうぎ（渋谷の「恋文横町」にはぎょうぎ屋が並んだ）でニンニクへの抵抗をなくしてから、韓国焼肉とキムチは急速に普及した。私のすがめの仮説だが、日本人の心の中で潜在的にニンニクを一段下にする気持は、中国が朝鮮戦争であの大国アメリカを負かした時から、しかと意識することなく消え去っていった。

戦後十数年経ってアメリカに留学した時、私だけでなく家内もよく、「Koreanか?」とたずねられた。「No」とこたえたと次は「Chineseか?」であった。カリフォルニアやニュー・ヨークと違いミッド・ウエストの地方都市では、当時東洋人を見かけることがまれであった。どうしても自分なり、その父親や兄弟達が朝鮮戦争で死線を共にした韓国人が、始めにきたのだろう。

私は中国には行ったこともないし、中国人の知合いも少ない。それでも前出のユーさんとその家族、この数年間アメリカの大学で一緒に仕事をし、二人で一冊の本⁽¹⁾を仕上げたりんさんとその家族とはきわめて親しい関係にある。1984年夏、1年間のアメリカ在外研究を終えた帰り途、ユーさんを訪ねて数日間台湾に遊んだ。

当時ユーさんは台中の農科大学の学長から、李現總統のあとをついで台湾省の農林庁の長官になっており、彼の公用車で奥さんにあちこち案内してもらった。ユーさんの奥さんは前の席に座り、運転手さんとペチャクチャおしゃべりをする訳だが、その会話は全く対等で、「次はどちらへ参りましょう。はい、かしこまりました。只今の時間は多少道が混み合っているかもしれませんが云々」といった風では全くない。

その運転手さんが特別だったのかも知れないが、ある観光名所のベンチで軽く昼食をとろ

うとしていた時など、「ビール飲むか?」ときいてくる。長官の古くからの友人に対してである。割と言葉にうるさい家内などびっくりして、「この人ビール飲まないあるよ」と、からかって答えたものである。英語で“Care for beer?”とたずねられても何ともないのに、相手の日本語が未熟なのを知っていても、矢張り気になるものである。

しかしこうした傾向はこの運転手さんに限ったものではない。公舎に泊めてもらった翌朝、今日はみんなが朝食を良く食べる店に案内するというので近くの饅頭屋に行ったのだが、そこで出会った庁の部下の人達のわれわれに対する態度も、例えばアメリカの“Hi! How are you?”という感じてあった。私より20才以上若いリン氏の私に対する態度も、基本的には「ハイ! ヒロシ」で、言葉の上で敬語がないだけでなく、目上と目下、あるいは年長と年下という意識はない。そういう意味では中国(の人)は西欧に近い。

その点韓国には敬語があるし、その背景をなす年長者と年少者、あるいは先輩と後輩の関係は日本以上に残っていて、私の心情に一致する。ただその点に関しまさなかったのは、1992年にハワイの国際会議で一緒になったソウル大学のC教授である。彼は私より少くとも1~2才若く、北海道大学の私の大学院時代の級友U君とは親しいらしい。そんな事で私は彼を同輩として扱ったのだが、彼は初対面で私を自分より10才くらい若いと思い込んだ節がある。こちらの打ち解けようとする言動の1つ1つが触ったらしく、結局親しくならず仕舞いであった。

私のすぐ上の兄は、退職後高分子関係のプラント建設のコンサルタントとして、台湾と韓国にそれぞれ1~2年づつ招かれた。金銭的な処遇は台湾の方がはるかに良かったが、精神的には韓国の方がずっと快適だったと兄は言う。台湾は、会社の中の間人関係において上下の差が少なく一見民主的なようだが、彼が設計を指導した若い技術者達は、いつも上役の顔色をうかがって自分達の意見を出そうとしない。他方韓国では上下関係がはっきりしているが、設計上の大事なことなどでは、時にトップの意見に逆っても、「この点は Mr. Mori の言う方が正しい、あるいは自分はこう思います」と堂々と発言し、敬語は崩さないまま毅然と自己主張をする。

「トップ・ダウン」ではなく、「ボトム・アップ」の日本の企業社会のなかで育ってきた兄にとっては、韓国の方が水に合ったのであろう。謝金は「申し訳程度」であったが、毎月1~2週間日本に一時帰国する時は、大抵ファースト・クラスを手当てしてくれ、とれない時など秘書役の人は、「Mr. Mori, すみません・すみません。お詫びに今晚はフランス料理でも何でも好きなおところに御案内します」という調子だったそうである。その点台湾では、「謝金をちゃんと払っているのだから、一時帰国の飛行機の切符など自分で安いものを探して帰

ればいい」という態度だったようである。台湾の方が精神的風土においてずっとドライで、西欧に近い。

注

- (1) Hiroshi Mori and Biing-Hwan Lin, *Japanese Beef Market...Distinctly Unique*, Senshu University Press, March 1994

韓国人と日本人の違い—— 呉『チマパラム』

韓国人と日本人の違いに気付かされ教えられたのは、1991年から92年にかけてニュー・ジランドのマッシー大学に留学中に、同大学の角林氏の奥様が貸して下さった、呉善花^{オソソフ}『スカート^ソの風・チマパラム』三交社、1990年12月であった。著者は女性ながら軍人の経歴があり、陸軍士官学校出の軍人を恋人に持っていたこともある。そういう人だから日本に来てしばらくの間は、日本の男性は何と弱々しく、頼り甲斐がないのだろうと感じていた。例えば彼女が通訳をするビジネスの会合でも、日本の男性は、論理的には一応こういう結論になるのですが、「これは私の個人的な見方でして」「一概にそう言えないかもしれませんが」などと、わざわざ自分の立論を崩すような話をあちこちに挟むことが多い。そういう時韓国の男性なら、「自分はこれについてはアメリカの大学でも徹底的に勉強してきたので、絶対これしか考えられない」と、自信をこめてきめつける。そこが頼もしい。ところが余り自信なげな発言をしていた人が、若くてもその分野ではパイオニア的な存在であることが後でわかり啞然とすることがある。

そう言えばわれわれ学者の間でも多少余所行きの学会などでは、「私は不勉強で最近の議論は余りフォローしていないのですが」などと前置きして、チクチクとボディーにこたえるコメントをする人が少くない。「私はその分野ではズブの素人ですが」の前置とは全く逆の場合がある。国際的な会合などで日本人は大抵、「貴方の言われることは全く尤もですが云々」とくる。私は若い頃幾度か会議や対談の通訳をして、「I agree with you *but* …」と訳して、あとから「彼（等）は全く agree（同意）していないではないか」と文句をいわれたことがある。事実“but”のあとは、直接的ではないにせよ、あなたは全く正しくないと縷縷述べたてるのだから。

日本人は否定したり、断ったりする時は相手を傷つけまいとして婉曲に、遠廻しに言って相手にそれとなく気付かせようとする。しかし相手の外国人は、初めに yes と言ったのに結果は no なのは一体どういうことかと怒ったり、時にこちらへの信用をなくす場合も少くな

い。“Yes but No”である。日本人は、「気付かないのは相手がトロイので、そんな奴は相手にしない」でいけないしいきたいが、国際社会では通用しないことが多い。

そう言えばこんな事があった。ニュー・ジランドからアメリカとヨーロッパを廻っての帰路、香港からソウルまでは「韓国の全日空に当る」ASIANAで、ある人の御好意でファースト・クラスに乗せてもらった。乗客はたまたま家内と私の2人きりだった。キャビンのスチュワーデスはわれわれ2人に付き切りで、周囲に気兼ねなくいろいろおしゃべりすることが出来た。彼女の日本語は濁音が正確で、完璧であった。それを誉めると、彼女の曰く「私は大学で音声学を専攻しました。」そこ迄は良い。しかしその後「私大学で一番でした。」には、家内も私も口をあぐり、呉善花の言うのはまさにこれだと合点したのである。日本人だったらさしづめ、「お誉めにあずかって恐縮です。しかしそんな事いわれるとこれ以上しゃべれなくて困ります。何しろ学生時代は遊んでばかりいましたから」であろう。

ニュー・ジランドのマッシー大学で私のところによく訪ねてくれた韓国人の院生S君（前出）は、よく私に「先生は謙遜すぎる」と言っていた。その都度「いや、私は本当に不勉強。この年になって朝から晩迄電卓をたたいているだけで、理論なんて無関係なのだから」などと言うのが常だった。ニュー・ジランドを離れる少し前に彼は博士論文の構想を持ってきたが、ケインズ、シュンペーター、サミュエルソンとビッグ・ネームと、あれこれ理論をまくしたてるので辟易したことがある。「そういうのは君の課題とは余り関係ないのではないの」と言うと、今度は私に向かってシュンペーターの事を滔滔と講釈しにかかる。「勘弁してくれ!シュンペーターは大学院の頃東畑（精一）先生について随分読んだんだから」と言いたくとも、彼には常常「学生時代は遊んでばかりいて、この10年近くは牛肉の事しかやってない」と言ってきたのだから、ツー・レイトなのである。

加害者意識の無さ

農業総合研究所の海外部で一時期同室だった浅田（喬二）氏は近世史の専門で、朝鮮統治下で朝鮮人の土地を取り上げ、過酷な地主・小作関係を通しいかに朝鮮の人々を収奪したかを刻明に研究していた（『旧植民地・朝鮮における日本人地主階級の変貌過程（上・下）』『農業総合研究』昭和40年10月・同41年1月）。

私の父親は電気の技術屋で、幾ヶ所かの大規模灌漑事業の電気関係を担当し、父の工場ではよく大きなポンプやモータの修理をやっていたから、父の店もわが国の「帝国主義的収奪」に与っていたのかもしれない。しかし小さい頃の身の廻りの経験や観察から、朝鮮人民の搾

取の上に贅沢な生活をしていたという記憶は余りない。母は一日中店で働いており、子供は6人いたが、内地から来ていた父の姉がすぐ上の兄と私の面倒をみてくれ、手伝いのオモニー⁽¹⁾が住み込むようになったのは小学校の2～3年生くらいの頃からである。

小学生の5年生頃から目に見えて食料が乏しくなり、その頃から終戦までごはんを腹いっぱい食べたという記憶は殆どない。中学の1年生の冬だったか兄と2人で内地に旅行し、母の実家の岡山県の農家で、真白なお餅の入ったお雑煮を出されて感激した。また長姉が嫁いでいた先の滋賀県の農家で、畑からとってきたばかりの甘いほうれん草のたっぷり入ったすき焼を、世の中にこんな美味しいものあるのかしらとガツガツパクついた時の事をいまでも思い出すくらいである。

小6か中1の時、父の店の職工長のところに、彼の奥さんか誰かが昼食を届けてきたのを見たことがあるが、ほうろうのお重につまった弁当の量と種類の多さに、何か別世界をみるような、不思議なねたましさを感じたのを覚えている。

父の店には販売・工事・修理部門を合わせて100人近い従業員がいたが、日本人は父、母と長兄に、工場に職長クラスの工業専門出の若い日本人が1人いたきりで、あとは全部韓国人であった。給与や賞与なども年末、母が総支配人の柳さんと工事関係の責任者李さん（前出）と夜遅くまでああでもないこうでもないやっていたから、韓国人に対する差別があったとの認識は薄い。また小学生3年の時に移り住んだ住まいも、店や工場の関係で住民の大多数が韓国人の地域で、食料品の配給なども廻りの韓国家庭と同じであった。

小・中学校は日本人学校で、韓国人の生徒は総督府の高官、大学教授や高名な医者の子弟などに限られ、1クラスに1～2名程度にすぎなかった（当時は不思議に思わなかったが、これは歴然たるセグリゲーションである）。本人達は何かにつけいやな思いをしたに違いないが、彼等の多くはいいところの息子達で頭も良く、大抵柔道や剣道などに秀でていたので、韓国人だからと言って馬鹿にされたり、イジメの対象になったという記憶はない。

しかし当時朝鮮に居た日本人の多くは、無邪気にも「八紘一字」の精神を信じ、朝鮮人の生徒にも毎日の朝礼では「皇国臣民の誓詞」を唱和させていたから、うちで多少でも自国の歴史を教えられていた朝鮮の人にとっては、つらい、いやな思いをしていたに違いない。しかし日本人同級生の大半はそうは思っていない。

20年以上前に中学の韓国人の同級生、「創氏改名」後の旧姓 O, 現 S 君（前出）がアメリカの国際医学会出席の帰りか何かで来日した。K 医大の A 君とは仕事の関係で親しい関係が続いており、またすでに同級生の幾人かは訪韓して S 君の世話になっていた。いまは亡き世話好きの T.O. 君が音頭をとり品川駅に近い M.S. 君の会社の寮で歓迎会が開かれた。九州などか

らの参加もあり、同級生200人のうち40人近くが集まったであろうか。T.O.君は譜面までつけて昔の校歌を1番から3番まで、他に2つ3つ、かつて海兵や予科連に出掛ける学友を送る時に歌った歌をコピーして皆に配布した。S君が入って来たらそれらをみんなで歌って迎えようという趣向である。

当時の校歌は、改めて歌詞を見る迄もなく「皇御国^{スメラミクニ}の云々」,「欧亜を結ぶ地の利の幸云々」と、まさに「八紘一字」「大東亜共栄圏」そのものである。私は、「これは止めにしよう。O(旧姓)に失礼だ」と異議を唱えた。しかし参会者の多くは「Oだって毎朝歌っていたのだから、懐かしい筈だ」,中学時代から秀才の誉れ高く、大学卒業後もエリート・コースまっしぐらのT君に至っては「森,馬鹿な事を言うんじゃない。スメラミクニとは別に天皇とは無関係で、そもその意味はこれこれしかじかだ。お前はそんな事も知らなかったのか」と相変らずの秀才振りを発揮した。

私は「君みたいに学はないけど、昔歌っていた時はそういう風には教えられていなかった。当時のOがどう思っていたか知らないが、こういう歌が愉快的な筈はない。折角の遠来のお客さんに対して失礼だ」と言い張って譲らなかった。小学校に入る前からウチ同士でも付き合い、心を許していた幹事役のT.O.君は「しょうがない。森は相変わず〇〇党で困ったものだ」と言いながら引き込めてくれた。会場のI社寮のすき焼は私にとって始めての松坂牛で、O君も大いにエンジョイしたに違いない。わいわいがやがやと久し振りの歓談の後は、有志揃って夜の赤坂あたりに繰り出した。

在京の中学の同級生を中心に「京中〇〇期チング(仲良し)会」が年に3~4回、虎ノ門近くの小料理屋の2階を貸り切って開かれる。毎回締めは例の校歌と寮歌の放吟だが、私は別に(韓国の)S君が居ても居なくとも、どうもこれは苦手である。私は肉体的にも精神的にも成熟が遅く、当時は誠に無邪気に「スメラミクニ」を信じていただけに、戦後は、当時もっと大人だった級友とは違い、反動的に強く引つかりを覚えるようになった。「アインス・ツバイ・ドライ」と例の高歌放吟は延々と続くので、何時迄もトイレに入っている訳にもいかず、ついついその会には欠席するようになるのである。

注

- (1) お母さんの意。そのオモニは私の母親くらいの年だったであろうか。よく「宏坊ちゃんはやさしい」と言ってくれたが、他につらいことが多かったということであろうか。オモニー、涙がこみあげる程なつかしいよ。本当に有難う(コウマスミニダ)。

海外トイレ事情

はじめに

「手洗所はこの先の階段を下りた〇〇町方面のりばにあります」(東横線某駅ホームにて)

「路面修復工事のためこの先渋滞が予想されます。トイレ(の利用)は次のPA(パーキング・エリア)でお早目に」(某日名神高速道路にて。但し原文通りでないかもしれない)

そう沢山の国を知っている訳ではないが、公衆トイレに関しわが国くらい親切で完備しているところは世界中どこにもない。後述するが、例えばアメリカのボストン市の地下鉄では、幾つかの線の交差する主要駅(Government Center)でも、公衆トイレはない。あるいはどこかにあるのかも知れないが、慣れない旅行者が2~3の人にきいた位では見付からない。ニュー・ジランドでも、第1の都市オークランドと首都ウェリントンを結ぶ幹線の1号線沿いには、“レスト・エリア”とサインのついたところがあちこちにあり、バーベキューをする台などを置いてあるが、かなり広い休憩所でもトイレのあるのを見たことはない。後で繰り返すが、旅行中気を許して昼食の時などビールやワインを飲むものなら、かなりつらい思いをすることになる。

「コーヒーを飲みたい」

10年程前1年間を過したアメリカのニュー・メキシコ州の大学で、普及を担当していたK教授はよく地方の催しなどにさそってくれた。ある朝早く彼の車でラス・クルーセスを出発して隣町にさしかかると、「コーヒーを飲んでいこう」と言う。朝食はまだだったので私も異存はない。道路沿いのハンバーガー店に立寄ることにした。北上を続けると間もなくまた、「コーヒーを飲みたい」と言う。

アメリカ人のなかにはコーヒー好きがいて、研究室のなかでも常時コーヒーを沸かしていて、1日にポットで2つも3つも飲む人がいる。K教授もそれだと思い、またつきあった。しばらくすると、「今日はどうしたのだろう」などと言い訳しながらまた「コーヒーを飲みたい」と言う。いくらアメリカのコーヒーが薄いからといっても、そうのべつに飲んでいる訳にはいかない。それを察してか「君は車に残っていてもいい」と言い捨て、横の入口からカウ

ンタとは逆の方に急ぎ、別にコーヒーなど買わずに出てきて、「さあ、let's go」である。

終戦後書物で英会話の勉強をしていた時、ひとのうちで「WCはどこですか?」と尋ねるより、「Where can I wash my hands? (手を洗うのはどこですか)」の方が品が良いというのを読んだ覚えがある。この原稿はカルホルニヤの義妹のうちのゲスト・ハウスで書いているのだが、アメリカでは WC とは余り言わない気がする。トイレの呼び方については後でふれることがある。

「コーヒーを飲みたい」というのは K 教授だけの表現かもしれないが、世界中どこにいても、マクドナルドやバーガー・キングなどの店には必ずトイレがあり、気軽に利用できると考えてほぼ間違いない。というのは逆に、ニュー・ジランド、オーストラリア、イギリスなどどこでもそうだが、飲食店には必ず客用のトイレがあるとは限らないのである。ビールやワインを出し、広さもそこそこの店で、日本の標準からすればあって当然と見えるところで、「トイレはない」と言われて泡を食ったことがある。その点上述のファースト・フード店は、世界中どこに行っても安心して駆け込むことが出来る。老婆心ながら、そのような時は、コーヒーくらいは飲んで欲しいものである。

アメリカのトイレ事情

(1) 男・女便所の隔離

いまから40年近く前、東大の K 教授がアメリカの視察旅行から帰国され、内輪の研究会で帰朝報告をされたことがある。恐らくアメリカにおける農産物の生産・流通や、それを支える研究に関する話だったと思うが、内容は記憶にない。ただ「アメリカはどこに行っても、男便所と女便所が、大学の建物のなかでも、東端と西端のように離れて設けられている。これは社会の安全性と無関係ではない」と力説された。

当時私の在学していた東大（少くとも農学部3つの建物）では、女子学生の数が極めて少なかったこともあってか、女子の事務職員や実験助手は相当数いたにも拘らず、女子専用のトイレは存在しなかった。大学内でトイレが別々に離れてあるのは大変良いことで、K 先生は変な先生だ。どうしてそんなことを問題にするのだろうかくらいにしか考えなかった。

(2) トイレの呼び方いろいろ — Bathroom, Restroom など

私が初めてアメリカに行ったのはそれから10年近く経った1964年で、もう30才の半ばに達していた。2年間を過ぎたのは、中西部インディアナ州の小さな町ラフィエットにあるパー

デュー大学である。大抵どこのうちでも、トイレ、洗面所（シンク）およびシャワー付きの浴槽（バス・タブ）は一つの部屋に一緒になっており、あななる程便所の事をバス・ルーム（浴室）と呼ぶ筈だと納得した。終戦後間もなく、通っていた高校の位置する小田急線のとある駅で、何かわめいている進駐軍の兵士をみんなで遠巻きし、ようやく“bath room”と聞きとれた私が、「ここにはない。public bath room（公衆浴場）は駅を出たずっとむこうだ」と教えて、彼をパニックに落し入れたことがある。

うちやアパートの広告で、「3 寝室、1 3/4 浴室」とあるのは、手洗いの一つは浴槽のないシャワーだけの浴室ということも知った。1/2 bathはトイレとシンクだけ、それでどうしてbathなのだろう？ トイレと洗面所および風呂が1つの部屋にあるためには、トイレが無臭で清潔であることが一つの条件で、その意味では汲み取り式のトイレにはなじまない。アメリカでも水洗便所が普及したのは1930年代以降で、特に農家などでは便所は屋外に設けられており、風呂と一緒にではなかった。従ってトイレの事を一般にバス・ルームと呼ぶようになったのは、そう長い歴史ではないとのことである（ニュー・メキシコ州立大学教授の旧友ビル・ゴーマン）。

近年日本でも大抵の便所が水洗化し、ウォッシュレットなども随分普及している。しかし私の海外生活の経験から、少くとも日本人には便所と洗面台、浴槽が一緒なのは余りだけではない。夫婦の間でも、兄弟あるいは姉妹の間で、ひとが顔を洗ったり化粧している時に用をたすのは憚られるからである。便所、洗面台および風呂は別々の小部屋に仕切られている方が、私にはコンフォタブルである。そういう意味でトイレ＝バス・ルームという場合は、少くとも日本人にとって余り望ましいものではない（「日本人やスカンジナビア人は、現在でも女性のみならず男性の入浴時にも、女性の番台さんを公衆浴場で使っており、世界の多くの地域でも数世紀にわたり、家族全員が一緒に入浴することが行われている。

同じようなつましさと罪の意識の欠如、すなわちプライバシーの欠如は、排泄の場合にも見られる。排便は、必ずしも常にプライベートなものではなく、しばしば社会的に振る舞う行為でもあった。」A・キラ著、紀谷訳、THE BATHROOM—バス・トイレ空間の人間科学」TOTO 出版、1992年6月、初版3刷、20頁）。

30年前のパーデュー大学のユニオン（地下に大きなキャフテリアや娯楽施設、1階に学生診療所や劇場・講演会場などがある）は、現在のわが国大学の標準に照しても大変立派で、美しかった。研究室から近かったこともあって、昼食やコーヒー・ブレイクによく利用したものである。その男子トイレは明かりが蛍光灯で、洗面台の前の大きな鏡にうつる私はいつも顔色がすぐれず貧相で、こんなところに鏡などなければよいのと思っていた。ある日1階の廊

下を通っていた折、女子用の洗面所のドアが大きく開き、瞬間見るとはなしに中側がみえた。男子用の洗面所とは違い、ソファのような立派な椅子が置かれていて、室内装飾も何となくきらびやかで、ああこれならここで暫く休んでいける。トイレのことを“Restroom”と呼ぶ訳だと合点した。女の人が化粧直しをするという意味で、“powder room”とも言うそうである。しかし男性用のトイレまで“restroom”と呼ぶ理由は定かでない。

(3) トイレのボーイさん

パーデュー大学に在籍して間もなく、車で2時間半くらい北上したシカゴで小さな研究会があり、F教授の車で連れて行っていただいた。市の中心部のコンラド・ヒルトンにチェック・インした。“スタッフ・レート”（大学職員特別料金）で\$13.50（当時の為替率では4,860円）くらいだったと覚えている。夕食前一寸町中へ出て、F教授等と落ち合うべく1階のロビーに戻り、“レスト・ムール”に直行した。

そこでは、年取った黒人のボーイさんが用を足し終えた客にタオルをすすめたり、コートのエを取ったりしている。洗面台の上に小さな籠が置いてあり、コイン以外にも結構紙幣などもたまっている。私は合憎クォーター（25セント銀貨）を切らしていたので、10セントという訳にもいかず止むなく1ドル紙幣を置いて出た。当時の1ドルは360円で、日本ではそれ位でシャンプー・ひげ剃り付の散髪ができた頃であった。別におどし取られた訳ではないが、ひどく高い「トイレ代」だった感じを受けた。

それからというものはごく最近に至る迄、アメリカのホテルでは、ロビーの手洗いは、あらかじめボーイさんがいるかどうかを確かめておき、誰か立っているところでは、エレベーターでいちいち自分の部屋まで戻って用を足すことにしていたものである。

まだ大学院の学生だった頃、指導教官の東畑先生は私が地方に調査に行く時など、「宿屋は、一番安い部屋でもいいから、その町の一番いいところに泊った方がいいよ」と言われて、県庁などへの紹介状に加えて、2千円くらいのお小遣いを下さった。先生のお気持ちは定かでないが、私も社会人になって、特に海外に旅行する時は、全く私的な時以外はその土地のなるべく一流のホテルに予約を入れることにしている。

というのは、訪問すべき現地の機関やお世話して下さる商社の方から、必ずといって良いくらい投宿先をきかれる。予定の変更、出迎えの都合などからそれは当然なことである。しかし厭な事は、同時に、初めての人の場合、泊っているホテルの格でこちらの社会的地位まで判断され勝ちな事である。私の場合、多くの日本人同様年よりかなり若くみえるので、多少無理してでも一流のホテルに泊った方が無難なのである。となると必然的にロビーのレストルー

ムにはボーイさんが居ることが多いのだが。しかし私も年を取り、他方円高が進んでいまや1ドル=90円ですむことであるから、その方が安全は保証されるし、いつも清潔に保たれているので、“restする「休まる」”のである。

初めてアメリカに留学したのは、ロックフェラー財団の下部組織、ADCからフェローシップをいただいたからであった。2年間の留学期間中に東部へは3回車で旅行したが、2度目の時はニュー・ヨークの5番街のロックフェラー・センターの20何階かにあるADCに挨拶に伺った。昼食にビールかワインを御馳走になったので事務所に戻ると、黙って廊下に出てトイレを探した。MENのサインのあるドアを開けようとするが上手くいかない。止むなく前に立って見ていると、大きな木札のついたキーを持った人が中に入って行く。くつついて入って行くのもやばいので、ADCの事務所に戻って訳を話すと、「どこに行ったのかと心配していた。この鍵を持って行きなさい」と、例の木札のキーを渡してくれた。ロックフェラー・センターの20数階のフロアでも、いちいち鍵なしではトイレにも行けないのはいささが驚きであった。ここで10年前のK教授の話（前出）が俄かによみがえってくる。

(4) 公衆トイレと安全性

公衆トイレと安全性、犯罪の関係で言えば、こんな事があった。米国はかなりあちこち訪れる機会があったが、北東部のマサチューセッツに行ったのは昨年（94年）の4月であった。10年程前に日米間における牛肉・オレンジの通商問題の研究を通じて知り合い、日本ではうちにも泊ってくれた当時アリゾナ大に居たRobert Rが、たまたま御両親のところに帰省しているところをたずね、幾晩かお世話になった。着いた翌々日だかに印象派の絵画のコレクションで知られるボストン美術館（Museum of Fine Arts）をみた後、お上りさんよろしく地下鉄を乗り換えてハーバード大学に行ってみた。細川内閣が揺れていたのも、ハーバード・スクエアーで日本の新聞を手に入れるのも目的の1つであった。

アメリカの大学はずい分あちこち見ているので、ハーバード大学だからと言って特に強い印象は受けなかった。スクエアーの雑誌スタンドには世界各国の新聞が積まれていたが、日本のものは一週間前の『日経』しかなく、期待外れであった。それより何より、昼食時に気を許して飲んだワインが利いてきて、トイレに行きたい。大学構内の幾つかの建物に入ろうとするのだが、昼間なのにどこのドアにも鍵がかかっていて入れない。キャンパスのもっと奥に行き、学生会館にでも行けばあるのだろうが、それ迄のこともない。地下鉄の乗り換え駅の構内で拝借しようと思ひ帰途につく。Government Center 駅に着き、きょろきょろ見渡すのが見当らない。乗り換え切符を売っている係の人にきくが、そっけなく「ない」と言う。少々

パニックである。

止むなく朝きた路線を30分程逆行し、Rのうちの最寄り駅近くのレストランに駆け込み、事無きを得た。折角の印象派の絵や、美術館のキャフテリアで出された素敵に繊細なターキー・サンドイッチにも拘らず、私にとってボストンの印象は余りよろしくない。

その晩 B 大学でアメリカの農業史を教えておられる R の御母堂が、私共のために日本に関心を持つ幾人かの大学人を自宅の夕食に招待された。主な話題は細川さん辞任の事、日本の米の自由化や世界の食糧問題であった。そういう問題については結構話が合う。米をめぐる日本人のセンチメントについては、同情的ですらあった。ただボストンの印象についての質問に、私は正直に昼間の「トイレ騒動」に言及し、「日本なら大抵の地下鉄の構内にはトイレがあり、真夜中でも安心して使えるのだが」と申し上げた。

それに対し R が、「以前はボストンでも地下鉄の主要駅にあったが、そういう便益のために安全性を犠牲にする訳にはいかないのだ」と抗弁し、全員が「その通り」と言う。ある人は、「アメリカと日本は違う。今日だって貴方は気付かれたでしょうが、G・C 駅からここ迄の30分の間に、人々のしゃべっている言葉が幾つ変わるか。人種の問題は単に白と黒だけでなく、ある区間はギリシャ語が支配的かと思えば次はアラビア語になり云々」と、例の「日本単一民族主義」を振りかざしてくる。日本が安全なのは単一・同質民族だからで、他方アメリカが近年危険なのは、余りに人種が混ざり合っているからだ。

ボストンのあと私達はロンドンに移るのだが、安全と人種に関する議論は、ロンドンの地下鉄に乗ってみればすぐわかる。どの時間帯に乗っても、ロンドンの地下鉄はまさに人種・民族の坩堝である。どこもここもお世辞にもきれいとは言いがたい⁽¹⁾、アメリカ、特にニュー・ヨークやボストンに比べ、いつの時間帯でも危険を感じることはない。ロンドンの地下鉄のなかで警官の姿を見掛けたことはないが、もし乗っているとすると丸腰して、どこかのんびりした顔をしているに違いない⁽²⁾。

注

(1) ロンドンの地下鉄の駅には、ごみ箱がない。IRA (アイルランド共和軍) の爆薬物テロをおそれ、置かなくなったのだそうである (森谷子 元日本長期信用銀行ロンドン支店勤務)。

(2) 1～2年前、ロンドンの息子のアパートの窓から、たまたま数台のパトカーに追われた若い男が逮捕される現場を目撃したことがある。アメリカの「サツ映画」でみるのと違い、すごく手柔かであったのにびっくりした。

外国に公衆トイレが少ないいま1つの理由

ボストンの地下鉄のトイレの事で本学商学部の日教授にお話しを伺ったことがあるが、教授は「むこうの人は小さい時から訓練されているから我慢がきく」との見解を示された。その意味では、私など今からでは遅いが、訓練が足りない最たるものということになる。ただ私はそこいらの事に関しては、私なりの仮説を持っている。

数年前のある学部の入試の英文に、人間は、1日に鼻から肺までの呼吸器官を通して、水蒸気として、通常2～3ポイント（1ポイントは約500cc）の水分を排出すると書かれていたのを覚えている。この他に体表から汗として発散するものがある。北欧系の人は前者が多く、日本人でも南方系の方は後者が多い。「寒い地域では鼻から肺胞までの距離が長く、気管などにも毛が沢山生えるなどして、肺を冷たい空気が直撃するのを防ぐようになっている。従ってそこからの水分の蒸散作用は多いのだろう」は、本学経済学部S教授のきわめてうがった見方である。

ニュー・ジランドでしばしば感じたことだが、寒い季節でもビールをがぶがぶ飲んで、余りトイレにいかないですむのは、白人は水分を呼吸器を通してどンドン排出しているからなのかも知れない。日本人の旅行者は、特に南方系の方は、ニュー・ジランドでは特に御用心なさせて頂いて下さい。夏でもからっとして、余り汗が出ませんから。

<編集後記>

浅学非才の編集子は海外のトイレ事情に精通してはいないが、たしかにロンドンにはトイレが少なかった。地下鉄の駅はもちろんのこと、デパートやスーパーマーケットにもない。ブリティッシュ・レイルウェイなどは有料の場合がすくなくない。機械式であれば小銭を常に持ち歩いている必要がある。最初のうちは往生したが、そのうちにハンバーガー店なら必ずあるし気軽に使える、などと知恵がついた。森所員とは違い、コーヒーも飲まずに利用させてもらった。慣れてしまえば、それなりの対処の仕方が身に付くものである。家を出る前、大学から帰る前にはかならずトイレによる、等。しかしながら、パブでビールを飲みながら、同時にその排泄の処理にまで思いを巡らさなければならないというシステムは人間にとって快適とはいえない。

最近の一連の物騒な事件で、東京の駅のごみ箱が封印されてしまった。そのうち、わが国の公衆トイレも同じ運命をたどることになるのだろうか。しかし、トイレを自由に使える便利さ、快適さを犠牲にして我々はなにを手に入れたのだろうか。

月報には、論文や研究ノートだけではなく、本号のようなエッセーなども投稿していただきたく思う。

(R. I)

神奈川県川崎市多摩区東三田2丁目1番1号 電話 (044)911-1089

専修大学社会科学研究所

(発行者) 泉 武夫

製作 佐藤印刷株式会社

東京都渋谷区神宮前2-10-2 電話 (03)3404-2561
